

---

# その日、たまたま……

遥風 覇鵠渡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その日、たまたま……

### 【Nコード】

N0134F

### 【作者名】

遥風 霸鷲渡

### 【あらすじ】

杉下和也と綾子は新婚生活を満喫していた。しかし、ある日……和也が少し気を抜いてしまったがために……。

**（前書き）**

ホラーと言うには微妙ですが；

姿見の前で、身なりを整える。ゆっくりしている暇は無い。

忙しく時を刻む左手首の時計に目を遣りながら、顔をしかめる。

六時十五分……普段ならまだゆっくりしていても良い時間だ。

得意先を接待するはずだった奴が、熱なんか出しさえしなければ。

「くそお、佐藤の野郎……」

お陰で、こつちにしわ寄せが来た。佐藤の代わりをするよう、連絡が入ったのだ。

ふうっと息をつき、鞆の中身を確かめる。書類、ハンカチ、財布諸々……そしてそして薬指。

真新しい銀の輝きに、にんまり目を細めると二階の寝室に眠る綾子に「言ってきます」を告げた。もちろん彼女に聞こえる訳はない。彼女は、まだ夢の中を漂っているのだから。

「ちきしょう、佐藤の奴。俺は睡眠不足なんだぜ？」

独り得意気に呟いたところで携帯電話が歌い始める。

「杉下ですが……あ、はい！今すぐにつ」

フローリングの廊下を滑って、靴を履き、慌てて玄関を飛び出す…

…。  
ああ、タイミングが良すぎたのだ……。  
この日、俺は初めて鍵をかけ忘れた。

勢いよくサラリーマン風の男が飛び出して来た。

余りにもタイミングが良過ぎて、一瞬ギョツとしたが……慌てる必要は無かった。そいつはこっちには目もくれずに駅の方へと走って行ったからだ。鍵もかけずに……。

男は電柱の側に自転車を止めると、素早く屋内に忍び込む。シンと静まり帰った家の中……人の気配は感じられない。

全く運の悪い奴だ。偶然にしちてもなあ。ちよろいもんだ。

酒の飲み過ぎで赤らんだ頬を緩め、男は室内を物色し始めた。

さんざんギャンプルに金を使ったこの男は、先程までは……それで、ただの一般市民と言ってよい身分だった。

幾ら借金にまみれているからって、泥棒はさすがにしないだろうと、彼自身も思っていた。だが……。

『ふん、まあよ？ 鍵開けたままにしといてくれんなら……考えちまうかもしれないけどよ』

そう毒づいた矢先に、それが起こった。

これは天の思し召しに違いない。

切羽つまった彼は、犯罪者になる決意をした。

「へへへ、冷蔵庫のモンもかつぱらつてくかな」

印鑑と通帳と微々たる金を手にした男は、薄ら笑いを浮かべながらリビングに隣接しているキッチンへと向かう。

「おお、中々」

大きな冷蔵庫の内は、食材の宝庫だった。まっさらな卵の列に、牛乳・ビール・フルーツジュース、丁寧に並べられたタッパにはキムチや漬物が入っている。ラップのはつてある魚やらスパゲティーやらも、わんさかある。

あいつ、本当に独り暮らしかあ？

ビールとグラタンを引っ張り出した男のアルコール漬けの脳を、一抹の不安が掠める。

まさか……。

「あれ、かずちゃん今日は早いよねえ……」

若い女の声に、男はガタリと振り返った。

食器棚にぶつかった衝撃で、がちやりがちやりと皿が落ちては砕け散る。

薄汚れた赤ら顔を青くする男を見た若い女は、みるみる恐怖に顔を歪めていく……。

「きつき……」

若い女は、唇を震わせて今にも叫びださんばかりに目を見開いている。

まずいまずい、なんとかしねえと……なんとかなんとか、

なんとか……。

ギリリと目の端で包丁が光った。

男は乱暴にそれを掴むと、一心不乱に若い女へと突き立てた。

女のうめき声が消え失せるまで静かに、しっかりと突き刺し続けた。

やがて頬に飛び散った血液が乾いた頃……男は、はっと我に振り返りべたべたする包丁を投げ出した。

血まみれのＴシャツを冷や汗が濡らす。

「う、嘘だろ……」

目の前の光景に涙ぐみながら後ずさる。

首を激しく左右に振り、何度も何度もそれを繰り返している。

その内……壁に行く手を阻まれた男は、ずるずるとへたりこみ笑い出した。

「殺す気は……なかったんだ……」



いつもと変わらない、平和な夕暮れ時……。いつもよりも早く帰宅した俺を迎えたのは、パトカーの不可解に回る赤いライトだった。几帳面に、数台止まった白と黒のパトカーにざわめく人垣……。黄色いテープで区切られた向こうは、我が家の玄関だ。

なんだ？ これ……。

ドサツと鞆の落ちる音を聞きながらも、拾う気にはなれなかった。

頭がぼんやりして、どうやって立っていればいいのか……。段々わからなくなっていく。

フラフラ足下がおぼつかなくなる俺の元に、紺の制服を着た警官が近寄って来る。

「杉下さんですね？ 何度かお電話差し上げたのですが」

事務的なその声を遠くで聞いていると、自分のものとは思えない様な細かい声が俺の喉を震わせた。

「そうですか……今日はちょっと……電源切ってたもので」

青ざめた和也はそれ以上口を開かない。

そんな彼を一瞥<sup>へっ</sup>するだけで警官は続ける。

「強盗殺人だと思っんですがね。犯人の気が触れてまして、落ち着くまでは何も聞き出せない状態です」

強盗、殺人？

口元を歪めて涙を溜める和也に、

「では後程」と神妙な顔付きをして警官は去って行った。

「そんな……そんなっ」

胸の内を何かがのたうち回る様で、息が苦しい。

和也は地面に膝つき、拳を打ち付けた。

顔に血が上り、涙が目尻から溢れて止まらない。

どこかでカラスが呑気に鳴く。その首を締め殺してやりたいと思った。

強盗殺人……。

「俺が……鍵、かけ忘れたから？」

和也は燃える様な夕映えの中で、いつまでも肩を震わせていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0134f/>

---

その日、たまたま……

2010年10月20日07時48分発行